



TITLE:

放翁と杜甫

AUTHOR(S):

一海, 知義

---

CITATION:

一海, 知義. 放翁と杜甫. 中國文學報 1962, 17: 148-161

ISSUE DATE:

1962-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177132>

RIGHT:

## 放翁と杜甫

一 海 知 義

神戸大學

成都の浣花草堂にある杜甫像のかたわらには、清の嘉慶年間以後、陸放翁（陸游、一一二五—一二〇九）の塑像が合

祀されている。ごく最近の中國からのニュースによれば、

この二大詩人の像は、のちに同じく配祀されたもう一人の詩人黃山谷（黃庭堅、一〇四五—一一〇五）の像とともに、今も草堂の一角にある工部祠に安置されているという（「人民中國」本年六月號）。

山谷と放翁が杜甫草堂に配祀されたのは、この二人の詩人が、杜甫を最も稱揚しまた敬慕したことによるのだろう。山谷は、「杜子美より以來、四百餘年、斯文は地に委つ。

文章の士は、世の能くする所に隨ひ、時輩に傑出し、未だ子美の堂に升る者あらざるなり」（「大雅堂の記」といひ、放翁もまた「詩降りて楚騷と爲り、猶お六律に中るに足る、天未だ斯文を喪わしめず、杜老乃ち獨り出ず」（「宋都曹、屢しは詩を寄せ、且つ和答を嘗す、此れを作りて之に示す」劍南詩稿卷七十九）とうたい、ともに杜甫を空前とはいわぬまでも絶後の詩人として推賞した。しかし放翁の場合、配祀の理由はそれだけではあるまい。放翁が杜甫とともに、最も偉大な愛國詩人、憂國の詩人であつたこと、それが合祀の大きな理由であつたにちがいない。

放翁は詩人として、また一個の憂國の士として、終生杜甫を慕ひ、杜甫から學ぶことにつとめた。したがつて杜甫の詩とその生涯は、放翁に深い影響を與えたはずである。すでに放翁のやや後輩である劉克莊（一一八七—一二六九）は、「放翁の學び力むること杜甫に似たり」（後村詩話、後村先生大全集卷一百七十四）と兩者を結びつけて論じ、また同じく方回（一二二七—一三〇六）が、

前輩、宋南渡の後の詩を評し、陸務觀を以て杜に擬す。

意その寤寐に中原を忘れざるは、「拜鵲」の心事と悲惋實に同じ。夫れその以て詩の心とする所を同じうすれば、則ち亦たその詩を同じうす。（王修竹詩集序）

というのをはじめ、後世兩詩人の類似を説く批評家はすくなくない。しかしながら一方杜甫と放翁は、詩人としてかなり異質な面をもそなえていた、と私は考える。だが兩者の詩人としての類似と相違を説くための十分な準備を、まだ私はもたない。

ここではその準備の一つとして、放翁の詩文、ことに詩にあらわれた杜甫觀を、その變化發展のあとをたどりつつ、やや詳細に紹介するにとどめる。深い傾倒はおのずから獨自の見解を生む。そうした創見の紹介に、本稿の焦點をあててゆきたい。

## 二

さきに引いた放翁の句「天未だ斯文を喪わしめず、杜老乃ち獨り出す」の前後を示せば、次の如くである。

古詩三千篇 古詩三千篇

放翁と杜甫（一海）

刪取財十一 刪取して財かに十の一

每讀先再拜 讀む毎に先ず再拜す

若聽清廟瑟 清廟の瑟を聴く若し

詩降爲楚騷 詩降りて楚騷と爲り

猶足中六律 猶お六律に中るに足る

天未喪斯文 天未だ斯文を喪わしめず

杜老乃獨出 杜老 乃ち獨り出す

陵遲至元白 陵遲して元白に至る

固已可憤疾 固より已に憤疾す可し

乃觀晚唐作 乃ち晚唐の作を觀るに

令人欲焚筆 人をして筆を焚かんと欲せしむ

此風近復熾 此の風 近ごろ復た熾なり

隙穴始難窒 隙穴 始より窒ぎ難し

.....

これは放翁八十四歳、といえはごく晩年の作品であるが、かく詩經・楚辭、そして杜甫を、文學史上の最高のピークとする考へは、すでに五十三歳のときの作品「白鶴館に夜

坐す」(劍南詩稿卷八、以下詩稿と略稱する)に、

屈宋死千載 屈宋 死して千載

誰能起九原 誰か能く九原より起さんや

中間李與杜 中間 李と杜と

獨招湘水魂 獨り湘水の魂を招く

自此競摹寫 此れより競いて摹寫するも

幾人望其藩 幾人か其の藩を望まんや

と見え、さらに五十九歳の「夢を記す」(詩稿卷十五)に

も、

夜夢有客短褐袍 夜 夢に客有りて 短き褐袍をまとい

り

示我文章雜詩騷 我に文章を示すに詩騷を雜う

.....

.....

李白杜甫生不遭 李白杜甫 生きて遭わず

英氣死豈埋蓬蒿 英氣 死するも 豈に蓬蒿に埋もれん

や

晚唐諸人戰雖塵 晚唐の諸人 戦うこと塵しと雖も

眼暗頭白眞徒勞 眼暗く頭白くなりて眞に徒勞なり

と見える。しかしこれらは、必ずしも放翁独自の評價を

示すものではない。杜甫の價值は、すでに北宋の時代に定

まつていた。すなわち北宋の大詩人蘇軾(一〇三六—一一〇

一)は、「古今に詩人衆し、而して杜子美を首と爲す」(王

定國詩集序)といい、また同じく王安石(一〇二一—一〇八

六)が、「予、古えの詩を考うるに、尤も杜甫氏を愛す」

(老杜詩後集序)とのべたことは、よく知られている。そし

てさきに引いた黃庭堅が、杜甫を詩作の規範とし、みずか

らを杜甫の忠實な祖述者としたとき以後、文學史における

杜甫の評價は定まつたといえる。

黃庭堅はいわゆる江西詩派の開祖とされ、放翁の時代に

おける文壇の主流は、なおこの詩派によつて占められてい

た。しかも放翁自身、この詩派の強い影響の下で詩作をは

じめている。したがつて杜甫を文學史的にどう位置づける

か、という點では、放翁は北宋以來の定説に賛意を表した

にすぎない。

放翁の創見は、杜甫の人間とその時代を見つめることに

よつて、生まれる。

### 三

放翁が杜甫を詩材としてとりあげた最初の作品は、四十七歳のときの「夜、白帝城樓に登りて少陵先生を懷う」と題する七律（詩稿卷二）である。

この前年、放翁は生涯の轉機となる蜀への旅に出た。蜀は杜甫放浪の地であり、放翁もまた十年の歳月を蜀の各地ですごした。その間、杜甫の古跡をめぐり歩いていくつかの詩篇をのこしている。これはその最初の作品でもある。

拾遺白髮有誰憐 拾遺の白髮 誰か憐れむ有らん  
零落歌詩遍兩川 零落の歌詩 兩川に遍し

人立飛樓今已矣 人の飛樓に立つは 今 已んぬるかな  
浪翻孤月尙依然 浪は孤月に翻りて 尙お依然たり

升沈自古無窮事 升沈 古えより無窮の事

愚智同歸有限年 愚智 同に歸す 有限の年

此意淒涼誰共語 此の意 淒涼 誰と共にか語らん  
夜闌鷗鷺起沙邊 夜闌わにして 鷗鷺 沙邊に起つ

放翁と杜甫（一海）

一篇のテーマは、杜甫の眞の理解者が乏しいことへのなげきである。裏がえしていえば、おのれのみが眞の理解者だとする自負である。しかし

升沈 古えより無窮の事

愚智 同に歸す 有限の年

と、一般化された表現は、杜甫への強烈なシンパシーを伝えるものとしては、なお弱い。放翁はこの時、杜甫をまだ一つの客體としてうたっているにすぎぬ、といつてよい。

なおこの同じ年、放翁が書いた文章「東屯高齋の記」（渭南文集卷十七）は、愛國者としての杜甫を激賞しており、

この詩の心情を理解する助けとなるだろう。

翌年、放翁は敵國金との對峙點である國境の町南鄭へ赴任する。七言古詩「錦屏山に遊びて少陵の祠堂に謁す」（詩稿卷三）は、その南鄭から閬中へ短い旅をしたときの作である。

城中飛閣連危亭 城中の飛閣 危亭に連なり

處處軒窗臨錦屏 處處の軒窗 錦屏に臨む

涉江親到錦屏上 江を涉りて親しく到る錦屏の上

却望城郭如丹青 却つて城郭を望めば丹青の如し

虛堂奉祠子杜子 虛堂 奉祠す 子杜子

眉宇高寒照江水 眉宇高寒 江水に照す

古來磨滅知幾人 古來磨滅せる 幾人なるかを知らんや

此老至今元不死 此の老 今に至るまで元死せず

山川寂寞客子迷 山川寂寞 客子迷い

草木搖落壯士悲 草木搖落して 壯士悲しむ

文章垂世自一事 文章 世に垂るるは 自ずから一事

忠義凜凜令人思 忠義 凜凜 人をして思わしむ

夜歸沙頭雨如注 夜 沙頭に歸れば 雨 注ぐが如し

北風吹船橫半渡 北風 船を吹いて 半渡に横わる

亦知此老憤未平 亦た知る 此の老 憤り未だ平かなら

ずして

萬竅爭號悲怒 萬竅 爭號して 悲怒を泄す

しのつく雨の中を、はげしい北風に吹きさらわれ、川の中央で浪にもまれて進みも退きもならぬ渡し船。そうした形象の中に、放翁は杜甫の憤り、民族の屈辱と人民の不幸をもたらししたものへの憤り、またそれを吐きつくさぬまま

に世を去つた姿を重ねる。この發想と描寫は、緊張度の高い他の措辭とともに、この詩をすぐれたものにしてゐる。だが放翁独自の杜甫觀を示すのは、むしろ次の二句である。

文章 世に垂るるは 自ずから一事

忠義 凜凜 人をして思わしむ

——詩文の才をもつて後世から仰がれるのは、それはそれでたしかに一つのすばらしいことにちがいない。だが杜甫の本領は、むしろその思想と行動にあつた。すなわち忠義、國家と民族と人民への誠實さ、それこそが凜凜ときびしく人の胸を打つ。

前述のごとく、杜甫は當時すでに人々から深く畏敬され、高く評價されてゐた。しかし敬意がはらわれたのは、詩人としての杜甫に對してである。しかもその敬意のはらわれかた、あるいは祖述のされかたは、歪んでゐる、と放翁は考へる。そのことへの不滿を、彼は隨筆集「老學庵筆記」(卷七)の中で、次のようにのべてゐる。

今の人には、杜詩を解するに、但だ出處(用語の典故)を

尋ぬるのみ。少陵の意の初めは是くの如くならざるを知らず。且つ岳陽樓の詩の、「昔聞く洞庭の水、今上る岳陽樓。吳楚東南に拆け、乾坤日夜浮ぶ。親朋一字なく、老病孤舟あり。戎馬關山の北、軒に憑りて涕泗流る」の如きは、此れ豈に以て出處を求む可けんや。縦い字字をして出處を尋ね得しむるとも、少陵の意を去ること益ます遠し。蓋し後の人は元より杜詩の古今に妙絶せる所以の何處に在るやを知らざるなり。

瑣末な字句の典據にのみかかずらわつて、詩人杜甫の本質にさえ迫りえぬ徒輩に、どうして人間杜甫がわかるか、放翁はそういういたかつたのであろう。

ところでこの年の暮れ、南鄭から成都へ轉じた放翁は、赴任の途次、有名な七絶「劍門道中、微雨に遇う」一首を作つてゐる（詩稿卷三）。

衣上征塵雜酒痕 衣上の征塵 酒痕を雜う

遠遊無處不消魂 遠遊 處として魂を消さざる無し

此身合是詩人未 此の身 合に是れ詩人なるべきや未や

細雨騎驢入劍門 細雨 驢に騎つて 劍門に入る

放翁と杜甫（一海）

——細雨騎驢、それはいにしえより詩人にふさわしい姿である。そんな姿で劍門の道へとさしかかった今、此の身には詩人こそがふさわしい境遇なのか。

ここには、詩人としての自負とともに、單なる詩人になりきつてしまうことへの歎息と自嘲がある。

放翁の本意は、侵略者金に對する積極的抗戰、占領された國土の恢復、そのための獻身にあつた。單なる詩人としてのみ評價されるのは不本意である。

文章垂世自一事、忠義凜凜令人思——此身合是詩人未、細雨騎驢入劍門、これら二篇の詩が同じ年に作られたのは、意味のないことではない。このころ放翁はすでに高名な詩人であつた。文章は文章として、むしろ忠義をこそという杜甫觀は、もはや客體としての杜甫解釋でなく、ここでは杜甫のイメージと放翁自身の姿とのフラッシュ・バックが行われているかに見える。

成都へ來た放翁は、當然のこととして杜甫の舊宅浣花草堂をしばしば訪れた。後世そこにみずからの塑像が合祠されたあの杜甫草堂である。次の五言古詩は、ある冬の一日、

ここを訪れたときの作、題して「草堂に少陵の遺像を拜す」(五十三歳、詩稿卷九)という。

清江抱孤村 清江 孤村を抱く

杜子昔所館 杜子 昔館りし所

虛堂塵不掃 虛堂 塵掃わず

小徑門可款 小徑 門款く可し

公詩豈紙上 公の詩 豈に紙上のみならんや

遺句處處滿 遺句 處處に滿つ

人皆欲拾取 人皆な拾取せんと欲す

志大才苦短 志大にして才の短きに苦しむ

計公客此時 計る 公の此に客たりし時

一飽得亦罕 一飽を得るも亦た罕なりしならん

匏窮端有自 匏窮端めて自ること有り

寧獨坐房琯 寧ぞ獨り房琯に坐せしのみらんや

至今壁間像 今に至るまで 壁間の像

朱綬意蕭散 朱綬 意蕭散たり

長安貂蟬多 長安 貂蟬多きも

死去誰復算 死し去れば誰か復た算えんや

管理する人もなく、塵のつもるにまかせた草堂を訪れて、放翁は杜甫のかつての苦しみを思う。だがその苦しみも、しかるべき理由があつてのこと、あるいはあなたみずからが求めていることでもあつたのではないか——匏窮端めて自ること有り、寧ぞ獨り房琯に坐せしのみならんや。

ここにも放翁獨得の感慨がある。放翁は成都に來てしばらくすると、役人生活にも見切りをつけ、國土恢復の理想を實現しようにも、そのすべもない絶望的な生活を送つていた。しかし理想を捨てたわけではない。その理想の故に、自分はしばしば職を免ぜられた。三十九歳の夏の轉任、そして四十二歳の夏の免官、すべて宿敵金に對する抗戰を主張してゆずらぬ頑固さのためであつた。人々は自分を笑ひ、自分は政界から孤立して行つた。だが、わが理想を捨て去らぬかぎり、この苦しみはみずから求めていることといわれても、やむをえぬ。それと同じように、杜甫よ、あなたの苦しみもまたあなたの理想の故ではなかつたか。

こうした獨白が、この詩の裏からきこえて來るように思う。放翁は杜甫を、もはやみずからと一體のものとして感



じていたにちがいない。この一體感は、あくる年（放翁五十四歳）、いよいよ蜀の地をはなれて都臨安へかえる途中、忠州（四川省忠縣）で作つた七絶「龍興寺に少陵先生の寓居を弔う」（詩稿卷十）において、さらに深まる。

中原草草失承平 中原 草草として 承平を失い

戍火胡塵到兩京 戍火 胡塵 兩京に到る

扈蹕老臣身萬里 扈蹕の老臣 身萬里

天寒來此聽江聲 天寒きとき此に來たりて江聲を聽く

戰塵に見舞われた兩京は、もちろん唐の洛陽と長安である。とともに、このときの放翁の意識下には、金にうばわれた宋の二つの都、開封府と河南府（洛陽）のことがあつたにちがいない。またこの詩には、作者自身の次のような注がつけられている。

少陵の詩を以て之を考うるに、蓋し秋冬の間に此の州に寓せるなり。寺門、江聲の甚だ壯なるを聞く。

この何氣ない注は、しかしわざわざつけられたものであり、はげしい揚子江の流れにじつと耳を傾ける杜甫のイメージは、この注によつて、同じ姿勢で耳を傾けている放翁

放翁と杜甫（一海）

のすがたと一つに重なる。

#### 四

五十四歳の春、蜀から都へ歸つた放翁は、その後いくつかの地方官や中央の官職を轉々としたのち、六十五歳の冬、禮部郎中の職を免ぜられて故郷に歸る。以後八十五歳で死ぬまでの二十年間、一度の短期間の出仕をのぞいて、ずっと故郷の農村で暮した。この時期の作品はきわめて多く、放翁詩の全集である劍南詩稿八十五卷のうち、實に六十五卷を占める。その中で杜甫を詠じ、また杜甫に言及した詩はすくなくないが、ここでは、比較的短い期間に作られた三篇の同題の詩をとりあげよう。その第一は、「杜詩を讀みて偶たま成る」と題する七絶である（六十九歳の作、詩稿卷二十八）。

一念寧容事物侵 一念 寧ぞ事物の侵すを容さんや

天魔元自是知音 天魔 元自ずからは是れ知音

拾遺大缺修行力 拾遺 大いに缺く 修行の力

小吏相輕尙動心 小吏相い輕んずるに 尙お心を動かす

天魔とは佛教のことばで、佛道の修行を妨害する惡魔をいう。

私はこの詩を讀んだとき、杜甫が陶淵明（三六五—四二七）を批評したことを思い出していた。杜甫が同時代人とはやや異つた淵明觀をもち、また早い時期における淵明文學の理解者であつたことは、伊藤正文氏の「盛唐の詩人と前代の詩人」（本誌第八、十冊）に詳しいが、私が思い出したのは、「興を遣る」と題する詩の一節である。

陶潛避俗翁 陶潛は俗を避けし翁なるも

未必能達道 未だ必ずしも能く道に達せず

……………

有子賢與愚 子有り 賢と愚と

何其掛懷抱 何ぞ其れ懷抱に掛けんや

淵明は當時一般に「悟りの境地に達した物靜かな隱遁者」と考えられていた。この詩はそうした常識に對する一つの打撃であり、新しい人間解釋であつた。それと同じことが、放翁の杜甫觀についてもいえそうである。黃山谷以

來、杜甫は歷代詩人の最高峰として、祖述の對象とはなつても、もはや批判の對象としては扱われなかつた。そして祖述が瑣末な字句の摹倣へと墮落し、尊敬が空虚な讚辭へと形骸化してゆく、それが一般の風潮であつた。そうした中で、

拾遺は大いに修行の力を缺き

小吏 相い輕んずるも 尙お心を動かす

というパラドキシカルな發言は、大膽で新鮮であり、放翁の杜甫に對する強い親近感と、その人間解釋の深さを示している。

同じく「杜詩を讀む」と題する第二の作は、七十一歳のときの七言古詩。詩稿の卷三十三に收める。

城南杜五少不羈 城南の杜五 少くして不羈

意輕造物呼作兒 意 造物を輕んじ 呼びて兒と作す

一門酣法到孫子 一門の酣法 孫子に到り

熟視嚴武名挺之 嚴武を熟視して 挺子と名ぶ

看渠胸次隘宇宙 渠の胸次を看るに 宇宙を隘しとす

惜哉千萬不一施 惜しい哉 千萬 一も施さず

空回英慨入筆墨 空しく英慨を回らして筆墨に入れば

生民清廟非唐詩 「生民」「清廟」にして唐詩に非ず

向令天開太宗業 向に天をして太宗の業を開かしめば

馬周遇合非公誰 馬周の遇合 公に非ずんば誰ぞ

後世但作詩人看 後世 但だ詩人と作て看るのみ

使我撫几空嗟咨 我をして几を撫して空しく嗟咨かしむ

城南の杜五、すなわち祖父杜審言としんげんの、狂傲の氣風をうけ

ついだ杜甫、その胸のうちは、この宇宙をさえせましとす

るほどの抱負でふくらんでいた。しかしその抱負の千萬分

の一さえ實現されることはなかつたのだ。その満たされぬ

ものが、はけ口を求めて杜甫の文學に結晶した。この詩の

#### 第四聯、

空しく英慨を回らして筆墨に入れば

「生民」「清廟」にして唐詩に非ず

というのは、そうして生み出された杜詩に對する最大級

の賛辭である。生民・清廟はともに「詩經」の篇名であり、

ある詩人の作品を、かく經書に比することは、尋常一様の

ほめことばではない。しかもこの賛辭は、次にあげる問題

放翁と杜甫（一海）

の詩に、再び同じ表現をとつてあらわれる。

清廟生民 伯仲の間

と。すなわち杜甫の場合、比較の對象となりうるのは、

詩經の詩だけであり、しかも詩經にくらべてさえ、杜詩は

兄たりがたく弟たりがたい價值をもつ。もちろん唐詩の部

類へなど入れるわけにゆかぬ。

だがこの賛辭が、一篇の詩の眼目ではない。放翁の主張

は、さいごの聯にいたつてあらわれる。かつてある偶然の

機會に、馬周の才能を發見し、これを任用したのは、時の

天子太宗であつた。もし天が太宗の事業の再現を可能にし

たなら、あなたこそ馬周と同じ運命をえて、事業をたすけ

えた人物であつたらうに。しかるに、

後世 但だ詩人と作て看るのみ

我をして几を撫して空しく嗟咨かしむ

——後世の人々は、杜甫を詩人としてしか見ない。かく

て私は机をなでつついたずらにためいきをつくほかはない。

さきに引いた、

文章 世に垂るるは自ずから一事

忠義 凜凜 人をして思わしむ

というのは、放翁四十八歳の主張であつた。以後二十數年をへて、放翁の主張は變らなかつたばかりか、より明白な形をとつてあらわれたといえよう。

後世 但だ詩人と作て看るのみ——この一句を見つめてみると、私はまた一つの聯想に誘われる。聯想するのは、毛澤東の「文藝講話」、正確にいえば「延安の文藝座談會における講話」の一節、「文藝批評には二つの規程があり、一つは政治規程、一つは藝術規程である。……どの階級社會におけるどの階級も、かならず政治規程を第一におき、藝術規程を第二においている」という、あの有名な一節である。

この聯想は、やや突飛であるかも知れぬ。だがそんな突飛な聯想を許すほど、放翁の主張は明白かつ強烈である。

この強烈さは、放翁自身の経験によつて、裏から支えられていた。四十八歳の放翁は、なお、

此の身 合あはに詩人なるべきや未や

と、自問自答し、懷疑し、逡巡していた。だがその後、

六十二歳の春、放翁は一つのショックをうけた。嚴州（浙江省建德）の知事に赴任するとき、時の天子孝宗は、放翁にむかつてこういつた。「嚴陵（嚴州）は山水の勝れし處、職事の暇に、賦詠自適すべし」（『宋史』陸游傳）。天子もまた放翁を一個の詩人としてしか扱わなかつたのである。放翁がこれを身に餘る光榮とはうけとらず、むしろ強い反撥を感じ、反駁の意をこめた詩をつくつて天子にこたえたことは、すでに別の所で説いた（中國詩人選集二集「陸游」七ページ）。この反撥は晩年までもちつづけられる。八十四歳のとき、

書生 本もとと莘渭しんゐと輩ともにせんと欲せるに

踰そうとち蹠ちとして乃しかつて去つて詩人と爲りぬ（初冬雜詠第五、詩稿卷七十九）

というのは、その證據の一つであらう。莘渭とは古代の賢相伊尹と呂尚、踰蹠は失意のさま。本來の意に反して「但だ詩人と作て看」られたのは、杜甫だけではなかつたのだ。さて「杜詩を讀む」と題する第三の詩（七絶）は、この翌年、すなわち七十二歳の春に作られている（詩稿卷三十四）。

千載詩亡不復刪 千載 詩亡びて 復た刪せず

少陵談笑即追還 少陵 談笑して 即ち追還す

常憎晚輩言詩史 常に憎む 晚輩 詩史と言うを

清廟生民伯仲間 「清廟」「生民」 伯仲の間

ここでも杜甫は、詩經の詩の正統な、しかも唯一の後繼者として位置づけられている。それだけではない。杜甫の談笑のうちに發する言語が、そのまま詩經の詩の本質を復原した文學として結晶する、というのである。

これは當時にあつてもいささか過剰な賛辭と考えられたかも知れぬ。しかし過剰であるかどうかは別として、私自身は次の一句に注目する。

常に憎む 晚輩 詩史と言うを

杜甫の詩が、時代の實相をリアルに反映したものととして、世に「詩史」と稱されたことは、すでに新唐書の杜甫傳に見える。

甫は善く時事を陳べ、律切精深、千言に至るも少しも衰えず。世に詩史と號す（新唐書卷二〇一）。

そしてたとえば放翁のやや先輩である王十朋（一一二一—

放翁と杜甫（一海）

一一七二）に、「詩史堂に登りて少陵の畫像を觀る」と題する詩（梅溪先生後集卷十二）があり、

敬して遺像を瞻 詩史を觀る

とうたうように、當時詩史の稱はもはや通説となつていた。放翁の一句は、そうした通説や常識に對する強い反擊である。「憎」という、詩語としてはあまり使われぬ措辭が、反擊のはげしさを示している。

放翁の主張はこうである。——杜甫の詩は單に時代の様相をリアルに寫しとつただけのものではない。そこには一つの明瞭な政治性、方向性が存在するのだ。それは詩經大雅の生民の詩、同じく周頌の清廟の詩が、國家の起源とその繁榮、さらに人民の生育に思いを致し、そのためになされる人々の獻身の姿をうたうごとき、そうした方向性である。それを無視して、杜甫の創作を單なる詩史としてしか見ない輩を、私はつねに憎惡する——。

ところで、杜詩を單に詩史と稱すべからず、とする主張は、必ずしも放翁にはじまるわけではない。北宋末から南宋初にかけて、侵略者金に對する積極的抵抗の主張をかか

げて戦つた重臣李綱（一〇八五—一一四〇）の「杜子美」と題する詩に、すでに次のような句が見えるという（齊治平「陸游傳論」引梁谿集、未見）。

豈徒號詩史 豈に徒だに詩史と號するのみならんや  
誠足繼風雅 誠に風雅を繼ぐに足れり

こうした評價は、あるいは李綱や放翁を含めたいわゆる主戦派グループに共通のものであつたのかも知れぬ。

しかし李綱の豈徒號詩史——ただ詩史と稱するだけでは十分でない、という句と、放翁の常憎晚輩言詩史——詩史と稱するやからを嫌惡する、という句をよみくらべるならば、そこには主張の尖鋭化、徹底化が見られる。放翁の主張は、やはり放翁独自の徹底した見解にもとづくものとしてよいであろう。

## 五

以上で放翁の杜甫觀を示す「放翁詠杜詩」のおおむねは紹介しえたと思う。

晩年の放翁は政界からはなれ、故郷の農村にとじこもつ

て、表面靜かに暮っていた。しかし若い日その胸にうえつけられた憂國の至情は、この老人の全身にひろがりもえつづけていた。そしてそうした感情の激發が、時に杜甫への思慕と結びつくこともあつた。「事を書す」と題する七絶（詩稿卷五十八）は、その一例である。

關中父老望王師 關中の父老 王師を望む

想見壺漿滿路時 想見す 壺漿 路に滿つる時

寂寞西溪衰草裏 寂寞たる西溪 衰草の裏

斷碑猶有少陵詩 斷碑 猶有り 少陵の詩

このほか放翁がその晩年に杜甫を詠じた詩、杜甫をうたう句をふくむ作品として、次の數篇がある。

窮居（詩稿卷三十二）、貧甚だしく常用の酒杯を賣り云云

（同四十二）、秋興（同四十七）、老馬（同五十八）、舍東四詠

（同六十八）、李杜の詩を讀む（同七十）、青城の舊遊を懷

う（同七十三）、夔州を思う（同七十五）、身世（同七十五）、

子適に示す（同七十八）

しかしこれらの作品では、必ずしも杜甫觀の眼目を示す獨得の見解乃至その發展は見られないので、ただ詩題を示

すにとどめる。

放翁の杜甫觀の眼目は、やはり「文章垂世自一事、忠義凜凜令人思」、「後世但作詩人看」、「常憎晚輩言詩史」などの句にあるだろう。しかしこれらが、詩人としての杜甫を十分に評價した上での、放翁の結論であつたことはいうまでもない。私は最近百篇に近い放翁の詩を翻譯する機會をもち、陸詩に見られる杜詩の投影の深さを、兩者のきわだつた異質性とともに、しばしば感ぜざるをえなかつた。その投影は、たとえば「宋詩研究」（香港商務印書館、一九五九年版）の著者胡雲翼氏が、放翁の句、

無窮江水與天接

不斷海風吹月來

をあげて、杜詩との類似を説く、そうした皮相なものではない。しかしこの點の解明については、はじめにものべたように、他日を期したいと思う。

放翁と杜甫（一海）

五山版千家註杜詩 永和二年（1376）刊

